2025 年 5 月

詩　編　　通　読

（5 月　1 日）「詩編 51：15～21」
しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を　神よ、あなたは侮られません。　（詩編 51 編 19 節）

・「打ち砕かれ悔いる心」という言葉が 19 節に出てきます。わたしたちは心が打ち砕かれるような経験を望まないかもしれません。というのも「打ち砕かれる」というと、打ちのめされるようなイメージがあるからです。
・「主よ　主よ　聴きたまえ　くだけし心の　祈言（ねぎごと）を」と繰り返す聖歌があります。聖歌 128 番「イェスきみ　イェスきみ　み救いに」という大斎節の聖歌です。砕かれた心の祈りの言葉を聴いてほしいという願いが歌われます。
・自分が砕かれるというのは、変えられるということです。自分の力に頼って歩んできた生き方が、神さまに救いを求める生き方に変えられる。罪を犯し続ける自分に気づけたからこそ、「わたしを変えてください」と祈ることができるのです。

（5 月　30 日）「詩編 66：10～15」
人が我らを駆り立てることを許された。我らは火の中、水の中を通ったが　あなたは我らを導き出して　豊かな所に置かれた。
（詩編 66 編 12 節）

・わたしたち聖公会では、主日（日曜日）の聖餐式で用いる聖書箇所が決められています。教会暦（教会のカレンダー）に基づいて、3 年周期でどの箇所を読むのかが定められています。
・クリスマスやイースター、ペンテコステのときにはその箇所が読まれ、アドベントやレントのときにもふさわしい箇所が選ばれます。それは礼拝の中で、神さまがわたしたちのためになさってくださったことを、何度も想起することを大切にしているからです。
・この詩編 66 編にも、「我らは火の中、水の中を通ったが　あなたは我らを導き出して」という一文があります。この言葉を唱えながら、出エジプトでの出来事を思い起こしていくのです。そしていつまでも忘れずに、心に刻むのです。

（5 月　31 日）「詩編 66：16～20」
しかし、神はわたしの祈る声に耳を傾け　聞き入れてくださいました。
（詩編 66 編 19 節）

・「わたしに成し遂げてくださったことを物語ろう」と作者は書きます。これはいわゆる「証し」というものです。キリスト教の教会の中でも、礼拝の中で「証し」をすることを大切にしている教派があります。（聖公会ではあまり見られませんが）
・人々は集まり、神さまのみ業を告白し合っていたようです。神さまはどのように自分たちに関わってくれたのか。どのようなときに自分は神さまの愛に気づかされたのか。どうやって悲しみから立ち直ることができたのか。
・様々な出来事の中で神さまを感じ、祈る声に神さまが耳を傾けてくださったことを感謝する。わたしたちの間でも、大切にしたいことです。教会の中でも気軽に、「証し」し合うことができればよいですね。

（5 月　2 日）「詩編 52：1～6」

お前の考えることは破滅をもたらす。舌は刃物のように鋭く、人を欺く。

（詩編 52 編 4 節）

・「悪よりも強い神の慈しみ」：知恵文学的な詩編です。2 節に書かれている出来事は、ノブの祭司アヒメレクの家にサウル王から逃れたダビデを見つけたエドム人ドエグが、そのことをサウルに告げたというものです。

・サムエル記上 21 章と 22 章に書かれたこの出来事によって、ノブの祭司が多く殺されてしまいます。3～6 節には、破壊をもたらす人間を非難する言葉が並びます。ドエグのおこないは人々の命を奪い、悲しませるものでした。

・「力ある者よ、なぜ悪事を誇るのか」という問いかけは、わたしたちにも投げかけられているのかもしれません。わたしたちは言葉一つで人を貶め、その人の命を奪うものだということを、心に留める必要があるかもしれません。

（5 月　3 日）「詩編 52：7～11」

あなたが計らってくださいますから　とこしえに、感謝をささげます。御名に望みをおきます　あなたの慈しみに生きる人に対して恵み深い　あなたの御名に。

（詩編 52 編 11 節）

・昨日の箇所で、作者は破壊的な人間の姿を描き非難していきました。それを受けてわたしたちはどのように振る舞うべきかが書かれます。今日の箇所の前半には神さまへの畏れが、そして後半では神さまへの信頼と感謝が描かれます。

・「あなたに呼ばれてわたしは行きます（聖歌 534 番）」という歌をご存知でしょうか。韓国で作られた聖歌ですが、この 3 節の歌詞は詩編 52 編 11 節にある感謝の言葉と響き合います。

・「栄光の主イェスに　ひたすら仕えて　この世の重荷を　わたしは担おう　感謝の心で　よろこび祝い　あなたに　応えて　わたしは　行きます」。ここで歌えないのが残念なくらい、とても印象的なメロディーの歌です。いつか感謝のうちに、一緒に歌えたらいいですね。

（5 月 28 日）「詩編 65：6～14」

牧場は羊の群れに装われ　谷は麦に覆われています。ものみな歌い、喜びの叫びをあげています。

（詩編 65 編 14 節）

・今日の箇所では、世界の神として、また全地の神として、主を賛美していきます。教会の中で、神さまから与えられたものに感謝をささげる礼拝があります。その中の一つが収穫感謝礼拝です。11 月の終わりごろにおこなうことが多いようです。

・その礼拝で用いるのにふさわしい聖歌がいくつかあります。その中の一つ、212 番を紹介したいと思います。「人は耕し　種蒔き育て　主は日を照らし雨を降らせて　地の産物は豊かに実る」という 3 節の歌詞は、詩編 65 編 10～14 節が元になっています。

・神さまはわたしたちに地の恵みを与え、わたしたちを豊かに養ってくださるということに感謝し、賛美しているのです。この聖歌の作詞者は古本純一郎主教、みさ司祭の父親です。その詩の中に、すべてのものは必ず与えられるという信仰が読み取れます。

（5 月 29 日）「詩編 66：1～9」

神は海を変えて乾いた地とされた。人は大河であったところを歩いて渡った。それゆえ、我らは神を喜び祝った。

（詩編 66 編 6 節）

・「民の感謝の歌」：12 節までの前半は共同体によるほめたたえの賛歌、13 節以降の後半は個人による賛歌となっています。特に前半部分は、巡礼者が集まるような祭り（礼拝）の中で用いられていたようです。

・3 節に「御業はいかに恐るべきものでしょう」という言葉があります。それほど恐ろしい御業とは何でしょうか。イスラエルの人たちにとって、出エジプトの出来事はとても恐ろしいものでした。

・特に紅海が二つに割れて、その間をエジプト軍から逃れるイスラエルの人たちが歩いて渡った奇跡は、大切に語り継がれていきました。そして神さまを畏れることの大切さを、彼らは伝えていったのです。

（5 月 26 日）「詩編 64：6～11」

主に従う人は主を避けどころとし、喜び祝い　心のまっすぐな人は皆、主によって誇ります。　（詩編 64 編 11 節）

・詩編には多くの「救いを求める祈り」が出てきます。人が神さまを求める大きな理由は、そこにあるのだろうと思います。旧約聖書の時代、神さまは救いを与える代わりに、「律法」と呼ばれる掟を守るように命じました。
・しかし人は自分の力で神さまの前に正しくなることはできませんでした。約束を反故しておいて「お救いください」というのは、本来おかしな話です。けれども神さまは、すべての人を救うためにイエス様をお遣わしになったのです。
・人々が詩編の中で望んでいたような形で、救いは訪れなかったかもしれません。特に「敵」と呼ばれる存在についても、神さまは赦そうとされています。その中においてもわたしたちは、神さまの救いを喜びをもって受け入れたいと思います。

（5 月 27 日）「詩編 65：1～5」

いかに幸いなことでしょう　あなたに選ばれ、近づけられ　あなたの庭に宿る人は。恵みの溢れるあなたの家、聖なる神殿によって　わたしたちが満ち足りますように。　（詩編 65 編 5 節）

・「恵みの雨と豊作の感謝」：喜びあふれる賛歌です。この詩は 3 つに分けられます。5 節までは「神殿の神として神を賛美する」、6～9 節では「世界の神として神を賛美する」、そして 10 節以降では「全地の神として神を賛美する」という内容です。
・今日の「神殿の神として」という部分は、聖歌 301 番の中に引用されています。この聖歌は、礼拝堂聖別式のときに用いられるものです。ですからなかなか歌う機会はないと思います。
・この曲の中で大切なのは、礼拝の中で歌われる賛美が正しくふさわしいささげ物になるということです。「聞きたまえ　感謝の歌」、「この御堂に集う人に　導きと恵み与え　愛の満ちる祈りの家と　なさせたまえ」との思いが必要なのです。

（5 月　4 日）「詩編 53 編」

それゆえにこそ、大いに恐れるがよい　かつて、恐れたこともなかった者よ。あなたに対して陣を敷いた者の骨を　神はまき散らされた。神は彼らを退けられ、あなたは彼らを辱めた。　（詩編 53 編 6 節）

・「神を信じない輩」：この詩編は第 14 編とほぼ同じ内容になっています。ただし 6 節の描写は、この 53 編に特有なものになっています。6 節には特に、神さまの恐ろしさが描かれます。
・もし神さまがその恐ろしさを前面に出していたとしたら、わたしたちはどのように生きていくことができるのでしょうか。いつ怒鳴られるのかも分からない状態でドキドキしながら毎日を過ごす。これはとても窮屈に感じます。
・詩編の作者は書きます。「だれもかれも背き去った。皆ともに、汚れている。善を行う者はいない。ひとりもいない」と。だからこそ、イエス様の十字架による贖いが、わたしたちには必要なのです。

（5 月　5 日）「詩編 54 編」

神よ、御名によってわたしを救い　力強い御業によって、わたしを裁いてください。　（詩編 54 編 3 節）

・「助けられる確信に満ちた祈り」：救いを求める個人の祈りです。表題にある「ジフ人が来て、サウルに『ダビデがわたしたちのもとに隠れている』と話したとき」というのは、サムエル記上 15 章 15～28 節に書かれている出来事です。
・イスラエルの初代王であったサウルはダビデを恐れ、殺害しようとしていました。そのときにダビデはジフに逃れるのですが、ジフの人々はサウルに、「ダビデは我々のもとに隠れており、砂漠の南方、ハキラの丘にあるホレシャの要害にいます」と報告します。
・そのような状況にあって、ダビデは神さまに救いを求めるのです。「あなたの御名と御業によって」、わたしを救い、裁いてくださいと求めるダビデの祈りを、わたしたちも祈っていきましょう。

（5 月　6 日）「詩編 55：1～9」

胸の中で心はもだえ　わたしは死の恐怖に襲われています。

（詩編 55 編 5 節）

・「友に裏切られた者の神への信頼」：救いを求める祈りです。この詩編の中で、作者は自分の心の内を神さまに訴えます。彼はうろたえ、不安の中にあり、心はもだえ、死の恐怖に襲われ、恐れとわななきが沸き起こり、戦慄が覆います。

・想像するだけで、悲惨な状況です。わたしたちは自分の力だけではどうしようもない状況に、落とされることがあります。そのときには神さまに助けを求め、祈るしかないのでしょうか。

・作者はここで、「鳩の翼がわたしにあれば」と願います。鳩はノアの箱舟の物語の中で、地表が乾いたしるしとしてオリーブの葉を持って帰ってきました。ノアたちに平和を告げたのです。わたしたちの心の平安のために、鳩の翼がほしい。そう願います。

（5 月　7 日）「詩編 55：10～15」

わたしを嘲る者が敵であれば　それに耐えもしよう。わたしを憎む者が尊大にふるまうのであれば　彼を避けて隠れもしよう。

（詩編 55 編 13 節）

・「わたしを嘲る者が敵であれば　それに耐えもしよう」と 13 節にあります。作者はこれまで味方だと思っていた人物に裏切られてしまったようです。「だが、それはお前なのだ」という言葉には、怒りと悲しみが見えます。

・友達や仲間と思っていた人に裏切られることは、わたしたちも経験することがあるでしょう。何かの思い違いやすれ違いによっていつの間にか批判され、離れていかれてしまうことは、とても悲しいことです。

・さらに最近は SNS の発達によって、誹謗中傷まで書かれることもあります。ただそういうことがあっても、この作者のように「主よ、彼らを絶やしてください」と祈るのは、行き過ぎのように思いますが。

（5 月 24 日）「詩編 63：5～12」

床に就くときにも御名を唱え　あなたへの祈りを口ずさんで夜を過ごします。

（詩編 63 編 7 節）

・日本聖公会聖歌集には、「就寝前の祈り」というカテゴリーの曲が 5 つ収められています。しかし宿泊を伴う黙想会やキャンプでもしない限り、一緒に歌う機会は限られているため、あまり知られていないかもしれません。

・その中に、42 番「主の　みそばに」という歌があります。その曲の中におりかえし（リフレイン）があります。その歌詞は「主の　み恵みに感謝して　力の主をたたえ　新たな朝を迎えるまで　すべて主にゆだねる」となっています。

・床に就いたとしても、祈りつつ夜を過ごすと誓う作者のように、わたしたちも常に神さまを賛美したいと思います。「乳と髄」とは、一番美味しいところを指すそうです。それくらいのもてなしを、わたしたちはいつも神さまからいただいているのです。

（5 月 25 日）「詩編 64：1～5」

わたしを隠してください　さいなむ者の集いから、悪を行う者の騒ぎから。

（詩編 64 編 3 節）

・「迫害者に対する神の報い」：救いを求める祈りです。4 節に、「彼らは舌を鋭い剣とし　毒を含む言葉を矢としてつがえ」という言葉があります。舌が剣、言葉が矢としてたとえられています。

・言葉による攻撃が、人の心を貫いてしまうことがあります。「心無い言葉」だけではなく、「そういうつもりで言ったのではない言葉」も時として、剣や矢として人を傷つけ、心を破壊してしまうことがあるのです。

・そのような「敵意」から神さまが守って下さるようにと、作者は祈ります。しかし同時に、わたしたちの言動もまた、「敵意」として裁きの座に乗せられるかもしれないことを心に留めたいと思います。

（5 月 22 日）「詩編 62：8～13」

暴力に依存するな。搾取を空しく誇るな。力が力を生むことに心を奪われるな。

（詩編 62 編 11 節）

・いくら神さまに信頼していても、わたしたちは人間的な振る舞いをなかなか手放すことができません。暴力に依存し、搾取さえしてしまうわたしたちの姿は、本当に空しいものだと思います。
・イエス様はルカによる福音書 12 章 15 節で、このように語られました。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである」と。
・しかし力も、慈しみも、すべてわたしのものであると神さまは語られます。わたしたちはそれらにしがみつくことから解放され、神さまを唯一の避けどころとして歩みましょう。自分の力に頼る必要はないのです。

（5 月 23 日）「詩編 63：1～4」

神よ、あなたはわたしの神。わたしはあなたを捜し求め　わたしの魂はあなたを渇き求めます。あなたを待って、わたしのからだは　乾ききった大地のように衰え　水のない地のように渇き果てています。

（詩編 63 編 2 節）

・「神へのあこがれ」：救いを求める祈りです。この詩は詩編の中でも、最も神さまに親しく話しかけていると言われます。ダビデにはサウル王から逃れ、荒れ野で過ごさないといけない時期がありました。
・そのときに彼は、神さまの不在を感じ、魂の渇きや飢えを経験したかもしれません。しかし同時に、神さまなしでは生きることのできない自分の魂に気づかされていったのではないでしょうか。
・この詩は、教会の中でも重んじられてきたそうです。わたしたち自身、魂の渇きを覚え、神さまがそばにいてくださることを疑う日々かもしれません。その時にこそ、この詩を思い出しましょう。

（5 月　8 日）「詩編 55：16～19」

闘いを挑む多くの者のただ中から　わたしの魂を贖い出し、平和に守ってくださる。

（詩編 55 編 19 節）

・今日の 19 編から、一つの聖歌が思い起こされます。聖歌 465 番です。「しずけき川の岸辺を　過ぎゆくときにも　憂き悩みの荒海を　渡りゆくおりにも　心やすし　神によりてやすし」というのが 1 節の歌詞です。
・この歌はスパフォードという人が作詞しました。彼はこの歌を作詞する 2 年半前に息子を亡くし、2 年前に火災によって財産を失い、作詞する年には船の事故で 4 人の娘たちを失いました。しかしその中にあっても、神さまが平安を与えてくださると信じていたのです。
・「群がる仇はたけりて　囲めど攻むれど　試むる者荒びて　のぞみを砕くとも　心やすし　神によりてやすし(2 節)」。この聖歌のタイトルは、PEACE となっています。神さまに信頼して、主の平安を求めていきましょう。

（5 月　9 日）「詩編 55：20～24」

あなたの重荷を主にゆだねよ　主はあなたを支えてくださる。主は従う者を支え　とこしえに動揺しないように計らってくださる。

（詩編 55 編 23 節）

・神さまに信頼を置いていたとしても、わたしたちには苦難が訪れます。特にそれが、「愛する友の裏切り」からもたらされたときには、わたしたちは深い悲しみに陥れられることになります。
・ルカによる福音書 22 章 48 節には、イエス様が逮捕される場面が描かれています。「イエスは、『ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか』と言われた」とあるように、12 弟子の一人であったイスカリオテのユダがイエス様を裏切ったのです。
・ただここでイエス様がその悲しみを経験されたから、わたしたちが裏切られたときの悲しみや怒りを理解してくださるとも言えます。イエス様は悲しみの中で、十字架に向かわれました。そしてその血は、たくさんの「裏切り者たち」のためにも流されたのです。

（5 月 10 日）「詩編 56：1～9」

神の御言葉を賛美します。神に依り頼めば恐れはありません。肉にすぎない者が　わたしに何をなしえましょう。

（詩編 56 編 5 節）

・「情け深い神への信頼」：信頼を表明する救いを求める祈りです。表題にある「はるかな沈黙の鳩」という言葉は何を意味するのかよくわかっていません。七十人訳聖書では、「聖所から遠く離れた人々のために」という言葉に変えられています。
・表題にある「ダビデがガトでペリシテ人に捕えられたとき」というのは、サムエル記上 21 章 11～16 にある、ダビデがガト王の家臣に捕えられたときの出来事です。ダビデはそのとき、気が狂ったふりをして難を逃れました。
・ダビデは陰謀を企む人に、常に待ち伏せされていたといえます。わたしたちの前にも、常に罪が待ち伏せしています。そのときに神さまに拠り頼むことができるのか。祈ることができるのか。そこが大事なのです。

（5 月 11 日）「詩編 56：10～14」

あなたは死からわたしの魂を救い　突き落とされようとしたわたしの足を救い　命の光の中に　神の御前を歩かせてくださいます。

（詩編 56 編 14 節）

・11 節に、「神の御言葉を賛美します。主の御言葉を賛美します」という信仰の表明がでてきます。ここでいう「御言葉」とは具体的に、どのような言葉でしょうか。それは聖書に書かれています。
・「恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け　わたしの救いの右の手であなたを支える。(イザヤ書 41 章 10 節)」のように、「恐れるな」という呼びかけが出てきます。
・そしてその後には、「共にいる」という神さまの約束があるのです。その言葉を信じているから、わたしたちは神さまに拠り頼むことができるのです。そしてその感謝の礼拝をささげるのです。

（5 月 20 日）「詩編 61 編」

心が挫けるとき　地の果てからあなたを呼びます。高くそびえる岩山の上にわたしを導いてください。

（詩編 61 編 3 節）

・「逆境にある王の祈り」：救いを求める祈りです。サムエル記下 15～19 章には、ダビデ王がその子アブサロムの反逆にあい、エルサレムを追われアナハイムに逃れた物語が書かれています。
・ダビデはひたすら逃げ続け、性も根も尽き果てます。3 節の「地の果てから」という表現は、そのような状況を示します。しかしその中で彼は、「高くそびえる岩山の上に　わたしを導いてください」と祈るのです。
・この言葉は、自分にはとても見いだせないような安全な場所にわたしを至らせてくださいという意味です。神さまこそが災いからの避けどころであると信じているからこそ、この祈りができるのです。

（5 月 21 日）「詩編 62：1～7」

わたしの魂よ、沈黙して、ただ神に向かえ。神にのみ、わたしは希望をおいている。

（詩編 62 編 6 節）

・「神への信頼」：その表明です。表題にあるエドトンは前（39 編）にも出てきましたが、ダビデ宮廷の音楽指揮者の一人です。作者はこの詩編の中で、私たち人間と神さまとの関係を示しているようです。
・「わたしの魂は沈黙して」と作者は書きます。沈黙とはただ単純に言葉を発さないということではありません。恐れや不安、心配事などをすべて神さまに委ね切った状況を指します。「自分の力」をまったく手放すわけです。
・そのときに初めて、神さまのわたしたちに対する姿が見えてくるのです。神さまは岩であり、救いであり、砦の塔です。これこそが作者が知った神さまの姿であり、そしてわたしたちにも示されているものです。

（5 月 18 日）「詩編 60：1～7」

あなたは大地を揺るがせ、打ち砕かれた。どうか砕かれたところを癒してください　大地は動揺しています。

（詩編 60 編 4 節）

・「敗戦後の新たな希望」：救いを求める共同体の祈りです。「ゆりに合わせて」という表題は 45、69、80 編にも出てきます。「ゆり」は神殿の柱頭の上に飾りとして刻まれた花ですので、とても大切なものでした。
・また表題の「教え」は「諭し」とも訳され、この詩は記憶すべきものだという意味として理解されています。そして 2 節の「ダビデが…塩の谷で一万二千人のエドム人を討ち取ったとき」というのは、ダビデの戦果でした。
・サムエル記下 8 章 3～8 節、10 章 6～19 節、歴代誌上 18 章 12～15 節などに書かれているいわゆる「戦勝の記録」を覚えることによって、万軍の主がわたしたちの代わりに勝利して下さることを信じる、少し恐ろしい考え方です。

（5 月 19 日）「詩編 60：8～14」

どうか我らを助け、敵からお救いください。人間の与える救いはむなしいものです。（詩編 60 編 13 節）

・詩編の中には、いわゆる“民族主義”的なものが見られます。この詩編 60 編もその一つだとされます。これらのものは「聖戦の神学」と呼ばれることもあり、考え方によっては危険なものです。
・8 節から 10 節は共同体の祈りに対する神さまの応答です。神の民は今、辛苦をなめているが、神自らが出陣し、それらの敵から解放してくれる、そのようなことですが、そこに元々住んでいた人たちにとってはたまったものではありません。
・聖公会では朝夕の礼拝や聖餐式で、詩編を読む場面があります。しかしこの詩編 60 編を含め民族主義が色濃く出ている詩編は用いなくてもよいことになっています。それでも朝夕の礼拝で、「えっ？」と思う表現の詩編が読まれることもありますが。

（5 月 12 日）「詩編 57：1～6」

憐れんでください　神よ、わたしを憐れんでください。わたしの魂はあなたを避けどころとし　災いの過ぎ去るまで　あなたの翼の陰を避けどころとします。（詩編 57 編 2 節）

・「救いの曙を求める祈り」：救いを求める祈りです。表題に「滅ぼさないでください」と書いてありますが、58、59、75 編にも同じ言葉が出てきます。これは詩の題名だと考えられています。
・他にも、「民を滅ぼさないでください」という意味だとする説や、詩を書き写した人が「この詩を捨てないでください」という意味で書き足したという説もあります。ダビデがサウルを逃れて洞窟にいた物語は、サムエル記上 22 章 1 節および 24 章 3 節に書かれています。
・詩の作者は、神さまに憐れみを繰り返し求めていると同時に、「避けどころ」を必ず与えてくださるという確信を表明します。洞窟の暗闇の中にも光が届けられることを、わたしたちも信じていきましょう。

（5 月 13 日）「詩編 57：7～12」

わたしの魂は屈み込んでいました。彼らはわたしの足もとに網を仕掛け　わたしの前に落とし穴を掘りましたが　その中に落ち込んだのは彼ら自身でした。（詩編 57 編 7 節）

・作者は「目覚めよ、わたしの誉れよ　目覚めよ、竪琴よ、琴よ」と祈ります。日本聖公会の聖歌集には、「朝の礼拝」というカテゴリーの歌が 17 曲収められています。その中の聖歌 3 番の 1 節は、詩編 57 編 9 節を元に作られています。
・「起きよ　わが心　朝日に照らされ　喜びの歌を　み前にささげよ」というこの歌は、暗闇からの救出を願う思いが込められています。昨日の表題にあったように、この詩はダビデがサウルを逃れて洞窟にいたときのものです。
・7 節で作者は、敵対する者は必ず破滅すると書きます。そして曙を呼び覚ますと決意します。曙とは救いの時のことです。作者は「心を確かに」と二度繰り返します。朝日を待ちながら、賛美の歌を歌い続けるのです。

（5 月 14 日）「詩編 58：1～6」

神に逆らう者は　母の胎にあるときから汚らわしく　欺いて語る者は　母の腹にあるときから迷いに陥っている。

（詩編 58 編 4 節）

・「不正な裁判官を訴える」：主の公正を求める祈りです。この詩も 57 編に続き、「滅ぼさないでください」という言葉が表題にあります。「公平な裁き」や「不正」、「不法」という言葉は、法廷用語を思い起こさせます。

・今日の箇所の後半部分には、神さまに逆らう悪人たちの描写があります。そこに出てくる蛇は、アダムとエバがエデンの園から追放された物語に登場します。神さまはそのときに、「お前は、生涯這いまわり、塵を食らう」と蛇に告げます。

・そのような「悪」が幅を利かせるこの世界に、力なき人たちはジレンマを抱きながらも、神さまの裁きに望みを掛けます。ただコブラが近くにいると、恐ろしくて祈りにも集中できないかもしれません。

（5 月 15 日）「詩編 58：7～12」

人は言う。「神に従う人は必ず実を結ぶ。神はいます。神はこの地を裁かれる。」

（詩編 58 編 12 節）

・昨日の箇所で、蛇やコブラが出てきました。作者はその口から、歯を抜き去るように願います。うちにはトイプードルがいますが、何度が噛まれたことがあります。「この子の歯（牙）が抜けたらいいのに」、かわいそうですがそう思ったこともあります。

・ただ今日の箇所に出てくる「敵に対する報復」については、とても残酷な表現が続きます。もし敵対する人が「なめくじのように溶け」たとしたら、そのときにわたしたちは喜べるでしょうか。

・神さまはわたしたちの間を裁かれるというのが、聖書の伝えるところです。わたしたちに「自分は正しい」という確信があれば、それでいいでしょう。しかし自分がこのような報復を受ける立場かもしれないと考えたときに、今日の箇所はとても恐ろしいものとなります。

（5 月 16 日）「詩編 59：1～10」

わたしの力よ、あなたを見張って待ちます。まことに神はわたしの砦の塔。

（詩編 59 編 10 節）

・「血に飢えた敵からの助けを求める祈り」：救いを求める個人の祈りです。「サウルがダビデを殺そうと、人を遣わして家を見張らせたとき」とは、サムエル記上 19 章 11～17 節にある物語です。

・イスラエルの最初の王サウルはダビデに敵意を覚え、殺害しようと企てます。このときもサウルはダビデを殺そうとしますが、ダビデの妻でサウルの娘だったミカルがダビデを窓からつり降ろし、彼を避難させます。

・そのようにいつも待ち伏せされ、身構えられているような自分を、神さまは必ず助け出してくださるのだという信頼をここでは語ります。神さまはわたしたちの「砦の塔」として、救い出してくださるのです。

（5 月 17 日）「詩編 59：11～18」

わたしは御力をたたえて歌をささげ　朝には、あなたの慈しみを喜び歌います。あなたはわたしの砦の塔、苦難の日の逃れ場。

（詩編 59 編 17 節）

・今日の箇所の 17 節から、とても有名な歌が作られました。聖歌 15 番「来る朝ごとに」です。「来る朝ごとに　朝日とともに　神の光を　心に受けてみいつくしみ（御慈しみ）を　新たにさとる（1 節）」。

・この歌詞を受け、2 節以降にはわたしたちは神さまの恵みをどのように感じ、そしてどのように生きていくとよいのかが歌われていきます。「朝ごとに」、わたしたちは神さまに向きあっていくのです。

・詩編の多くは、イスラエルの人たちがバビロンに連れて行かれた「捕囚時代」にも読まれていました。彼らは「国」という避けどころを持たない中で、神さまにすべてを委ねていくのです。